

久松潜一 監修

萬葉集講座 第六卷

作家と作品 II

有精堂

萬葉集講座 第六卷

作家と作品Ⅱ

昭和四十七年十二月十日発行

監修者 久松 潜一
ひさまつ せんいち

発行者 山崎 誠

印刷所 株式会社 文弘 社

東京都千代田区神田神保町一―三九

発行所 有精堂出版株式会社

電話〇三(二九)一五二二番

振替口座 東京四〇六八四番

郵便番号 一〇一

◇乱丁・落丁はおとりかえいたします。

3392—550816—8610

目次

奈良朝の天皇たち

吉永登 一

大伴旅人

平山城児 一九

大宰府の歌人たち

林田正男 二〇

山上憶良の生涯

村山出 二五

山上憶良の作品

井村哲夫 二八

山部赤人

川口常孝 一〇九

高橋虫麻呂

金井清一 一二三

笠金村と車持千年

山崎馨 一五〇

中臣宅守と狭野茅上娘子

木下玉枝 一五三

遣新羅使人たち

服部喜美子 一六九

田辺福麻呂

森淳司 一八〇

大伴坂上郎女

小野寺静子 二〇五

大伴家持の生涯

小野寛 二二四

大伴家持の作品

尾崎暢殃 二四〇

家持をめぐる女性たち

桜井満 二七一

家持の歌友

加藤静雄 二九

東歌の人々

渡部和雄 三三

防人

遠藤宏 三三

遊行女婦と娘子群

犬飼公之 三四

作者未詳歌の人々

中川幸廣 三五

奈良朝の天皇たち

吉 永 登

はじめに

奈良時代の天皇で、万葉集に歌を残しているのは、元明・元正・聖武・孝謙・淳仁の諸天皇である。奈良遷都が新興勢力の藤原氏の献言によるものと思われるので、遷都後は藤原氏の勢力伸長に拍車をかけたことはいうまでもあるまい。時には不比等の死、その四子のほぼ時を同じうする病死によって、頓坐するかに見えても、勢の赴くところいかんともしがたいものがあつた。皇親政治最後の傑物といわれた長屋王の力をもつてしても、所詮は藤原氏の讒言にあい袋だたきにあうのが落ちである。

長屋王の死後はむしろ藤原氏内部の抗争であつたといつてもよい。橘諸兄、奈良麻呂親子の抬頭にしても、諸兄の母の橘三千代は藤原不比等の妻であり、諸兄と光明皇后とは父を異にする同腹のはらからであつた。

また藤原仲麻呂にしても、いうまでもなく藤原氏の一族である。孝謙女帝の乱行というおまけもあつて、世相を一そう薄汚いものになっているが、対抗馬を失つた自然の趨勢といえよう。

そうした政争を背景にした天皇の位置ははじめなもので、しかも五人の天皇中、三人までが女性である。よい歌が生れる環境でなかつたことはいうまでもない。

しても、より多く藤原氏の意志に出たものであることは明らかであろう。それほど藤原氏の勢力は抜くべからざるものとなっていたのである。

和銅元年（七〇八）二月、かねてからの懸案であった奈良遷都が決定して、その詔勅が下されることになった。遷都に詔勅を下すなど珍しいことであるが、人々を納得させる必要があったに違いない。遷都が新興勢力に利益をもたらすものとすれば、これ又藤原氏の意図に出たというのが真相ではなからうか。天皇家は旧勢力を代表する。新興勢力に利益をもたらすことは天皇家の衰退につながるものであって、そのことをも元明天皇が気付かぬはずはない。しかし勢の赴くところもはやいかんとも仕方がなかったのではなからうか。それに遷都が農民の生活を極端に圧迫するものであることも苦勞人の元明天皇が知らぬはずはない。

二月十五日、遷都の詔勅を布告する日である。式場の設営も成って、物部の武官が大楯を立てているとみえて、しきりに警戒の空弓を射る音が聞えてくる。好むと好まざるとにかかわらず、天皇臨場の時が迫ってくるのである。そうした緊迫した気持を表現したのが、天皇の

ますらをの軛の音すなり物部の大^{オオマヘツキミ}臣楯立つらしも（巻一、七六）

という歌であろう。苦悩に裏づけられておればこそ、実の姉御名部皇女の「我が大君ものな思ほし統神（祖先神）の継ぎて賜へる我無けなくに」（巻一、七七）のであろう。また皇女をしてこうした強いことばを吐かせたのも、その子、高市皇子との間に生れた長屋王の将来に期するところがあったからではなからうか。

「楯立つ」については在来は、翌二年に行われた蝦夷征伐に具えての調練と考えられていた。儀式説

も古くからあったのであるが、それが顧みられなかったのは天皇の苦悩と結びつかなかったからであるらしい。しかしそのためには「物部の大臣」を將軍と解さなければならぬ無理もあり、第一蝦夷征伐の兵士は現地の徴発であつて、訓練するにしてもその国斤所在地で行われるはずである。どうして都で、しかも前年に行われることなどあるのであろうか。

今では儀式説をとるものも次第に出て来たが、同じ儀式説にしても、大嘗会と解するなどいろいろある。いずれにしても「物部の大臣」は、モノノベノオホマヘツキミと読んで、当時右大臣であつた物部麻呂を指していると解すべきものと思われる。もともと物部氏は儀式に當つて楯を立てる家柄であつて、麻呂自身も楯を立てた経験を持っている。もちろん右大臣の今は直接たずさわることはなかったであらうが、物部氏の棟梁としてその名を挙げたものと考ええる。

奈良の都もほぼ出来上つて、いよいよ遷都がとり行われることになった。万葉集では和銅三年（七二〇）二月のこととしているが、続日本紀には三月十五日となつてゐる。藤原宮を出たのが二月で、正式に遷都の完了を告げたのが三月十五日であつたとすれば矛盾もなくなることになるう。

一行が永屋原の辺りまで来た時のことである。在来、永屋原は天理市の名柄のあたりといわれていたが、一行は少し西の中つ道を通つてゐるはずで、同じ天理市の井戸堂だという説がよいのではなからうか。そこはかなり開けたところである。興をとどめた天皇は

とぶ鳥の明日香の里をおきて往なば君があたりは見えずかもあらむ（巻二、七八）

という歌を口ずさむのであつた。女帝が「君」というのであるから、万葉秀歌（斎藤茂吉）の「この歌の『君』というのは、作者が親しまれた男性の御方のようである」という解釈のでてくるのも無理からぬ

ことであろう。しかしそれは晴れがましいところで大ぴらにすべきことがらでもなく、また元明天皇にそうした男性があったとも思われない。かりにあったとしても、身分からいって残しておく理由はないのである。

わたしはかつて、この「君」は天皇の亡き夫草壁皇子と解したのであるが、賛成する人も少くない。それにしても「君があたり」をわたしのように、草壁皇子と若かりし日を送った島宮のあたりととらないで、墓のある真弓岡のあたりと解する人もある。しかしそれには藤原は飛鳥の一部であることを前提にしなければならないことになり、少し無理があるのではないだろうか。

ついでにいえば「とぶとりの」が「明日香」の枕詞に用いられたのは、柿本人麻呂を別にして、これをはじめである。人麻呂が用いはじめて二十年ばかりの年月が流れている。

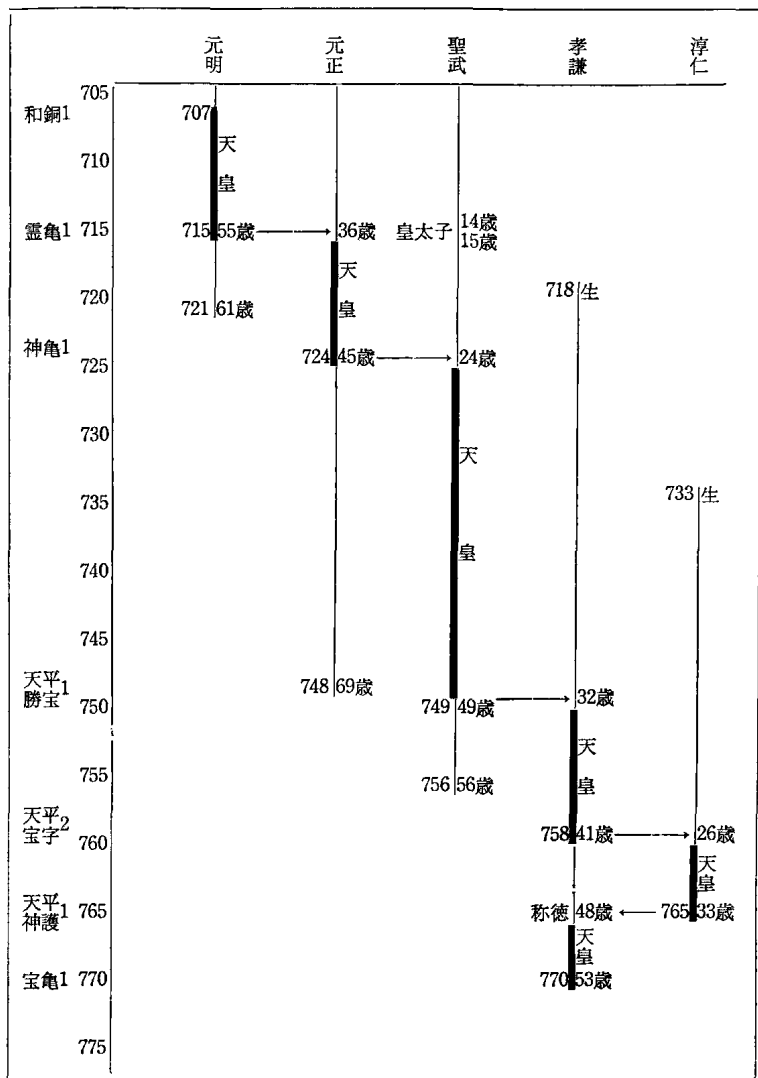
元明天皇は、斉明七年（六六二）の出生、血縁的には夫草壁皇子の叔母に当り、年も同い年か一つ上である。天智天皇の血を受けたむすめであり、随分勝気であったに違いない。病弱であったと思われる草壁皇子には特別の愛情を持っていたのではなからうか。

これより先、持統四年（六六五）の九月、持統天皇は紀州に出かけている。前年に夫草壁皇子を失った阿閉皇女すなわち後の元明天皇も一行中にあつたようである。あるいは傷心の皇女をいたわる旅であったとも言えよう。多分その度のことと思われるが、背の山（和歌山県伊都町）を越えた時、皇女は

これやこの大和にしてはわが恋ふる紀路にありとふ名に負ふ背の山（巻一、三五）
という歌を作っている。

通説は、これがわたしの恋いしたっている背（夫）という名を負った紀州路にあるという背の山である、と解している。しかし中には「大和にしては」の落着が悪いとして、大和においていつも行きたい

皇位継承図



と恋しく思っていた紀州路にある有名な背の山だと解しているものもある。たしかに「大和にしては」は、それでは大和でなければ夫は恋しくないのでかという反論もできそうである。しかしそれ以上に山を恋うと解することの方が無理なようで、恋うは古代ではむしろ苦しい心情であったと思われる。

それではどのように解したらよいのであろうか。わたしは通説に従って、そこに元明天皇の、思いあまってことばの足りぬ傾向を認めたいと考える。前述の「ますらを」の歌、「とぶ鳥」の歌、そして今の歌に共通して見られる現象だからである。

二元正天皇

靈龜元年（七二〇）元明天皇は位をむすめで文武天皇の姉に当る飯高皇女に譲っている。これが元正天皇である。元明天皇すでに五十五歳、当時としてはかなりの老齢であり、それに相次ぐ兄弟、従兄弟の死に世の無情を感じたのではなからうか。

孫の首皇子、後の聖武天皇は前年すでに皇太子になっている。それが無視せられての元正天皇の即位であった。皇太子は時に十五歳、皇位につくには早すぎる年とはいえないが、やはり母が皇・王族の出でないことが障害になっていることは否めない。藤原氏の勢力をもつてしても、宮子を皇后にすることすら困難で、皇后をおくことを阻止することが精一杯であったと思われる。

譲位の詔勅に、未だ年が若くて深窓を離れず、多端な政務を処理することは困難だからと見えている。案外皇親政治最後の傑物といわれた長屋王などの抵抗もあったのではないだろうか。天皇はどうしたことか結婚はしていない。在位九年、まったくの時間かせぎというべく、在位中に藤原不比等はなくなっている。

元正天皇の在位中の歌と思われるものは伝わらない。上皇として二十四年在世しているが、単に時の長短の問題ではないだろう。いつのことか左大臣長屋王の佐保の邸での宴会に聖武天皇とともにのぞんで次の歌を作っている。

はだ薄尾花さか葺き黒木もち造れる室は万代までに（巻八、一六三七）

長屋王が左大臣になったのは神亀元年（七四四）であるから、それ以後のことであろう。もとより佐保（奈良市佐保山町のあたり）のどのあたりであったか明らかでないが内裏からはかなり離れている。面白いことは不比等の邸宅は今の海龍王寺のあるところ、内裏からは至近の距離にあった。したがって、長屋王は同じ佐保に邸宅のあった大伴氏並みということになる。遷都が新興勢力に利益をもたらすことは邸宅の位置一つを例にとってもいえそうである。

歌詞に「室」とあるところを見れば、わざわざ上皇・天皇を迎えるために作ったものと思われる。同じ時に作った聖武天皇の歌に「黒木もち作れる室はませど飽かぬかも」とあるのを見ても、随分すきをこらしたものであったらしい。風流人長屋王の面目がうかがわれる歌でもある。

またいつのことであろうか、山村（奈良市山町）に出かけたことがあった。当時山村のあたり帰化人がいたようで、この行幸も何かかわりがあったともいえそうである。上皇は伴をして来た人たちに歌を作ることをすすめて自らも次の歌を口ずさんでいる。

あし引の山行きしかば山人の我に得しめし山づと（みやげ）そここれ（巻二十、四二九三）

この歌の作者は題詞に「先太上天皇」とあって、元明天皇でないかという説もある。田中卓氏の主張

するところで、興福寺縁起に、先太上天皇（元明）中太上天皇（元正）後太上天皇（聖武）と區別していることを論拠にしての發言である。たしかにそれに違いないが、一面それらは三人の太上天皇を區別する立場での呼び名である。現に後に触れる卷二十、四四三七の歌の題詞の「先太上天皇御製霍公鳥の歌一首」の細註に「日本根子日清足姫天皇（元正）也」とあることを見れば、元正天皇を先太上天皇と云うことは疑うべくもなく、やはり元正天皇と見るのが穩やかなようである。

この歌についてはほかに、歌の作られた時その他に異説がある。一つは歌詞に「山行きし、かば」とか「えしめし」などのことばから、現地での作でなく帰還後の作であろうとするものであり、他は題詞に「口号したまひき」などとあることから古歌を口ずさんだのであらうとするものである。後者のごとき題詞に「歌」とのみあつて「御製」とないことと共に傾聴すべき点もないではないが、全般から考えて輕々しく従えないものようである。

上皇は天平十六年（七四四）の夏に難波宮に出かけている。たぶんその度のことであらう、橘諸兄の「堀江には玉敷かましを大君を御船漕がむとかねて知りせば」（卷十八、四〇五〇）という歌に和して

玉敷かず（してと）君が悔いていふ堀江には玉敷き満てて継ぎて通はむ（卷十八、四〇五七）

という歌を作っている。「玉敷き満てて」は上皇自らの（たとえ命令したとしても）行為と見るよりほかはないが、それだと相手の恐縮しているのに追討をかけているようで和した歌らしくも思えない。即興の歌といつてしまえばそれまでであるが、わたしたちにわからぬ意味でもあるのであらうか。

同じ度のことである。上皇は

橘のとをの（たわわな）たちばなやつ代にもわれは忘れじこの橘を（卷十八、四〇五八）

という歌を作っている。橘諸兄の長寿をことほいだ歌という説もあるが、むしろ橘氏の繁栄を祝ったものと解する説がよいのではないだろうか。

上皇にはほかにもいつ作ったか明らかでないが、時鳥をよんだ

時鳥なほも鳴かなむもとつ人かけつつもとなあをねし泣くも (巻二十、四四三七)

という歌がある。時鳥の声を聞いていると、昔の知り合いのことが浮かんできてひとりで泣けてくるというほどの意味であろう。

その知り合いとは一体誰なのか。一生結婚することのなかった上皇だけに、ある日ある時の述懐として、しみじみしたものを感ぜさせないでもない。少なくともかみしもをはずした上皇の本心が目に浮かぶようである。

三 聖武天皇

聖武天皇の即位したのは神亀元年(七二四)、二十四歳の時のことである。和銅七年(七二四)に皇太子となつてゐるから、元明・元正の二天皇を経ての即位であつた。皇位継承の不自然さは、政情の不安を示すものでもある。妃は母宮子の妹光明子、神亀四年(七二五)には基王を生んでいる。生後三か月で皇太子にするなど、外戚藤原氏の強引さは目にあまるものがあつた。その基王も翌年になくなっているが、近親結婚の弊のあらわれでもあろうか。

藤原氏は皇太子の死を無駄にはしなかった。皇太子の死は長屋王の咒咀によるものと言ひふらして王を自殺にまで追い込んでゐる。馬鹿でない天皇はうすうす気づいていたかも知れないが、皇太子の死に

動転したこともあって、手のほどこしようなかったのではなからうか。思えば自らの手足をもぐにも等しい行為であった。

長屋王の死を機会に藤原氏は長年の懸案であった光明子を皇后にすることに成功している。続日本紀には皇后冊立の詔書を載せているが、その懸命な弁解はむしろ哀を催すものがある。

天平九年（七三七）には藤原不比等の四子、武智麻呂・房前・宇合・麻呂は流行病のため前後して死ぬという異変があった。ために藤原氏の勢力も頓挫したかに見えるのであるが、さすが長年にわたる蓄積には見るべきものがあり、間もなく盛り返しているから不思議である。対抗する勢力がなかったからでもあるうか。

それでも天平十年（七三八）橘諸兄が右大臣になって実権を握るに至ると多少情勢の変化を見るようになった。相次ぐ遷都がそれである。原因は橘氏と藤原氏との勢力争いにあったとすれば、これほど民衆を無視したことはないのであって、やがてはじまる東大寺の建立とともにどれだけ彼等を苦しめたかわからないのである。大仏鑄造に当って、金の不足に困っていた時、陸奥守百濟王敬福が黄金九百両を献じたこと、それを寿ほいで大伴家持が歌を作っていることも知られた事実であろう。

天平勝宝元年（七五〇）天皇は位を皇女の孝謙天皇に譲っている。大仏開眼の供養が行われたのは三年後の天平勝宝四年（七五三）のことであった。

いつのことであろうか、天皇は海上女王に次の歌を贈っている。

赤駒の越ゆる馬せの（馬の柵のように）標結ひし妹が心は疑ひもなし（巻四、五三〇）

海上女王は志貴皇子の女、聖武天皇の若かりし時の恋の相手ではなからうか。光明子という同い年の